ヤルマア　お前が悪いと云ふのは、そんな事が。人間が悲哀と失望の淵に陥つた時には、何んな心持に成るものだが、お前なぞには解らないよ——特に私の様な烈しい氣性の者がだね。

ギイナ　えゝ、そりやア左様かも知れません。それに私だつて何も自慢する譯ぢや有りませんよ。貴方は自家と云ふものが出來ると、間もなく本當に好い亭主に成つて下さいましたからね。——今ぢやかうして何も彼も整つて、此分で行けば着物や喫べる物でも、今に最少し手綱を弛めても可い様に成るだらうと、ヘードキツヒと二人で娛しんで居た所なんですよ。

ヤルマア　此虛僞の沼の中でかい。

ギイナ　本當に彼奴めが、二度と二たび閾を跨がせて遣らぬから可い！

ヤルマア　左様だ、私も此家を何んなに娛しんでたか知れないよ。それが皆夢だつた。かう成つては、何を樂しみに發明をつゞけやう。そんな勢は

ない。恐らく、私と一緒に發明も死ぬだらうよ。ギイナや、それを殺したものは誰でもない、お前の過去だよ、過去の罪惡なんだよ。

ギイナ（殆と泣出し相にしながら、）何卒そんな事言はないで下さい。私は只毎日貴方のため好かれとばかり思つて努めて來ました。

ヤルマア　一家の主人の夢は如何成ると思つて呉れる？　彼處の長椅子の上に寢轉んで、凝乎と發明のことを考へて居ると、私はそれが爲に最後の一滴迄精力を絞り取られるだらうと思つた、そんな豫覺が明々と浮んで來たものだ。此手に特許を握つた時は、私が——此世から解放される日だとさへ思つた。それでもお前だけは後に生き殘つて、死んだ發明家の妻として有福に暮させて遣りたい——と云ふのが、私の果敢ない夢だつたよ！

ギイナ（涙を拭きながら、）ねえ貴方、最うそんな話は止めて下さい。私は何んな事が有つても、寡婦に成つて迄生きて居たくはないのですよ！

ヤルマア　あゝ、そんな夢も皆消えて仕舞つた。今は既に萬事終れりだ。萬事終る！

ゲレーゲルス、ゼルレエ廊下の戸を細目に開けて覗き込む。

ゲレーゲルス　這入つても可いんですか。

ヤルマア　あゝ、這入り給へ。

ゲレーゲルス　（顔中滿足を以て輝きながら前へ進んで、二人に兩方の手を差出す。）偖て兩君――！（互み代りに相手の顔を眺めて居たが、ヤルマアに囁く。）あれは未だ濟まないのか。

ヤルマア　（聲高に、）最う濟んだよ。

ゲレーゲルス　濟んだ？

ヤルマア　僕は一生の間の最も苦い瞬間を經驗したよ。

ゲレーゲルス　だが、同時に又最も向上的なものだと、僕は思ふね。

ヤルマア　兎に角、序幕だけは濟んだよ。

ギイナ　ゼルレエさん、酷い事を爲さるのねえ。

ゲレーゲルス　（非常に驚いて、）こりや僕には解らないよ。

ヤルマア　何が解らないんだ？

ゲレーゲルス　あれ程大きなクライシスの後で――全然新しい生活の――あらゆる虚僞を離れて眞理の上に建てられた共同生活の出發點であるべき、彼のクライシスの後で――

ヤルマア　あゝ、そりや解つてるよ、好く解つてるよ。

ゲレーゲルス　僕は此室へ這入つて來たら、先づ君等夫婦が更生變容の光に打たれることだらうと、堅く信じて居たんだよ。それだのに、今見りや、こんな懶けた、重ッ苦しい、暗がりの外に何一つない――

ギイナ　あゝ、これですか。

洋燈の笠を取去る。

グレーゲルス　奥さん、貴方には私の言ふ事が解らないでせう。成程、貴方は少し時日を要するかも知れない。だがヤルマア君、君は如何だい？君は屹度大きなクライシスの後だけに、一層清々(すが〳〵)しい心持がするだらう。

ヤルマア　あゝ、勿論するよ。つまり――或意味でだね。

グレーゲルス　此世に過ちを犯したものを許して、愛の力によつて自分と同じ所へ引上げて遣る位愉快なことは有るまい。僕は堅く左様信じて居るよ。

ヤルマア　君は人間が飲み乾した苦い盃の效果をそんなに譯もなく打捨(うつちや)られるもんだと思つて居るのかい。

グレーゲルス　いや、そりや普通(なみ)の人には出來なからう。だが、君の様な人は？

ヤルマア　うむ、そりや好く知つてるよ。だがグレーゲルス君、左様急(せ)いで呉れても仕様がないよ。何しろ時日を要することだからね。

グレーゲルス　ヤルマア君、君は君の中に大分(だいぶ)鴨を持つてるね？

レリンゲ廊下の戸口に立つて居る。

レリンゲ　おゝ、又鴨が問題に成つて居るんだね。

ヤルマア　あゝ、翼の折れたゼルレエの獲物さ。

レリンゲ　ゼルレエさんの――？　ぢや、君等は彼の人のことを論じて居たのか。

ヤルマア　彼の人のことも――僕等のことも。

レリンゲ　（グレーゲルスに向つて、小聲で、）飛んでもない事を爲たね？

ヤルマア　君は何を言つてるのか。

レリンゲ　なに、僕は此藪醫者が早く退込(ひつこ)んで呉れや可いと思つて、心か

ら願つてるんだよ。此上居やうもんなら、君等二人を滅茶々々にして仕舞ふだらうからね。

グレーゲルス　レリングさん、此二人は滅茶々々に成りませんよ。勿論ヤルマア君については言ふ迄もないでせう、僕等は好く同君を知つてるからね。併し奥さんの方も、心の奥底には、確に忠實で物堅い或者が有るよ。

ギイナ（殆ど泣く樣にして、）それなら、私は私で關はないで置いて下さると可かつたんですわね。

レリング（グレーゲルスに向つて、）餘り失禮かも知らんが、一體貴方は此家を如何しやうと云ふんだね。

グレーゲルス　眞の結婚の土臺を築かうと云ふんです。

レルング　それぢや、エークダルの結婚は、現在の儘ぢや充分でないと云ふんですね。

グレーゲルス　勿論大概の夫婦と較べて不可ないと云ふんぢやない。併しこれが眞の夫婦とは云へませんよ。

ヤルマア　レリング君、君は『理想の要求』に對して、嘗て眼を開いたことが無いんだらう。

レリング　何だ詰らない！　だが、これエルレエさん、貴方は生涯の間に眞の結婚を何れだけ——まア總〆としてだね——何れだけ見たことが有るんですかい。

グレーゲルス　一度も有りません。

レリング　私もさ。

グレーゲルス　併し其の反對なものは無數に見ましたよ。而も左樣云ふ結婚が何んな惡い結果を生むかと云ふことを目の前に見せ附けられたものです。

ヤルマア　人間の全道徳的基礎が脚下にぐらつくことも有る。そりやア怖しいものだよ。

レリング　成程、僕は本當に結婚したことがないから、かう云ふ事に口は出せんかも知れない。が、これだけは解つてるよ。結婚の問題には子供が入つて來るだらう。ね、子供だけはそつとして置かなきや不可ないよ。

ヤルマア　あゝ――ヘードキッヒ！　ヘードキッヒが可哀相だ！

レリング　左樣だ、ヘードキッヒだけは此問題の外に置いて遣らなきや不可ないよ。君等二人は大人だ、夫婦の間だけの事なら好きなだけどたんばたん遣るが可いさ。だがヘードキッヒの事は注意の上にも注意して取扱はなきや不可ないよ、可いか。でなきや彼の子に取返しの着かないやうな危害を及ぼすよ。

ヤルマア　危害だつて？

レリング　左樣さ、或は彼の子が自分で危害を加へるかも知れない、又恐らく他人にも與へるだらうよ。

ギイナ　レリングさん、如何してそんな事が解るんでせう？

ヤルマア　彼の子の眼はそんなに早く危險に陷るんぢやなからうね、左樣かい？

レリング　僕は彼の子の視力について言つてゐるんぢやないよ。ヘードキッヒは今危ない年頃だアね。いろんな惡い事をおぼえる最中だからね。

ギイナ　そりや眞個ですよ――私も先から氣が附いてるんです　彼の子は臺所で火を弄ることが所好で、火事ごッこをするんだと言つてるんですよ。私は本當に火事を出しやしないかと思つて、何遍ひや〳〵させられたか知れませんの。

グレーゲルス（レリングに向つて）ですが、貴方は如何してそんな事が言へる

のです。

レリング　彼の子は身體の組織が變りかゝつて居るんですよ。

ヤルマア　子供も私が在る以上――私が此世に居る間は――

戸口に案内の者。

ギイナ　貴方、お靜に。廊下に誰方か見えた樣ですよ。（喚ぶ。）お這入りなさい！

ゼールピイ夫人散歩服を着て入來る。

ギイナ　（夫人の傍へ行つて、）まアベルタさん、貴方でしたか。

ゼールピイ夫人　えゝ、私ですよ。ですがお邪魔ぢやア有りませんか。

ヤルマア　いや、如何いたして。彼の家から密使ですね――

ゼールピイ夫人（ギイナに向つて、）本當の事を言ふと、今時分參れば、男の方は大抵戸外へ出て被坐しやるだらうと思つたのですよ。お別れをする前に、

一寸貴方に會つてお話を爲るつもりで上つたんですものね。

ギイナ　まア、それぢや何處かへ被行しやるんですか。

ゼールピイ夫人　えゝ、明日の朝――へエダル迄。ゴルレエさんは、今日の午後お立ちに成つたのですよ。（グレーゲルスに向つて、輕く。）私から宜しう申して呉れる樣に仰有いました。

ギイナ　まア如何でせう――！

ヤルマア　それぢやゴルレエさんが立たれた？　貴方は其後を追掛けて行くんですね。

ゼールピイ夫人　えゝ、それが如何したと云ふんですか、エークダルさん。

ヤルマア　左樣です、お氣を附けなさい。

グレーゲルス　そりや僕が說明するよ。親父は此女と結婚しやうとしてるのだ。

ヤルマア　結婚する？
ギイナ　ぢや、到頭左樣成りましたのね、ベルタさん！
レリング（稍聲を震はせながら、）そりやア何うも本當ぢやないね？
ゼールピイ夫人　えゝ、レリングさん、そりや眞個の話ですよ。
レリング　貴方は又結婚するのか。
ゼールピイ夫人　えゝ、左樣成るらしいんですよ。ヱルレエさんが特別の許可を得られたので、私どもは山へ參つて、極靜に結婚する積りなんです。
グレーゲルス　左樣云ふ譯なら、私も繼子の義務として、貴方の幸福を祈らなけりや成りませんね。
ゼールピイ夫人　何うも有難う——貴方のお言葉通りならね。ヱルレエの爲にも私の爲にも、何卒幸福な結果に成れば可いと存じて居るんですよ。
レリング　そりや安心して被坐しやい。私の知つてる限りぢや、ヱルレエ

さんは酒も飲まず、又先の馬醫者の樣に、細君を掘る癖があるとも思はれんからね。
ゼールピイ夫人　あゝ、ゼールピイのことは何も言はないで下さい。あれは又あれで好い所が有りましたからね。
レリング　ヱルレエさんの方が最つと好い所が有るさ。左樣思ふね。
ゼールピイ夫人　兎に角、彼の方は自分の好い所を冗に失くして仕舞ひは爲さらなかつた樣ですよ。左樣云ふことをしては、末が好くないものですからね。
レリング　今夜は一つモルギックと一緒に出掛けやう。
ゼールピイ夫人　レリングさん、そんな事を爲すつちや不可ませんよ。私の爲だと思つて——そんな事をして下さるな。
レリング　別段他の事は爲やしませんよ。（ヤルマアに向つて、）君も僕等と一

緒に出るなら、來給へ。

ギイナ　いゝえ、有難う。ヤルマアはそんな無駄費ひには參りませんからね。

ヤルマア（悶れて、半ば聲高に、）おい、默つて居ろッ！

レリング　左樣なら——ゼレルエの奥さん。

廊下の戸口から出て行く。

グレーゲルス（ゼールピイ夫人に向つて、）貴方はレリング君と大分御親密な樣ですね。

ゼールピイ夫人　えゝ、長年のお近附ですよ。一時は、二人の間に最つと話が進み掛けたことも御座いました。

グレーゲルス　左樣成らなかつたのは、貴方のお仕合せですね。

ゼールピイ夫人　まア左樣も言へるでせうね。ですが、私は始終衝動では物

事を爲ない樣に用心して居るんですよ。女と云ふものは、後先の考へもなしに自分を投出して仕舞ふやうなことは出來ないものですからね。

グレーゲルス　で、私が此の舊いお馴染のことを親父に告げやしないかと、些とは氣が揉めるでせうね。

ゼールピイ夫人　何故で御座います？　勿論、私は悉皆自分で話がして有りますよ。

グレーゲルス　實際？

ゼールピイ夫人　貴方の阿父樣は、私の事については、本當の事なら何も彼も御承知ですよ。私は悉皆お話しました。彼の方のお心持を伺つた時に、第一番に左樣したんですよ。

グレーゲルス　左樣すると、貴方は大概の人よりは餘程包み隱しのない方ですね。

ゼールビイ夫人　私は元から包み隠しは致しません。女は其方が可いんですよ。

ヤルマア　ギイナや、あれを聞いたかい。

ギイナ　え、、女にもいろ〳〵有りますからね。左樣して遣つて行く方も有れば、又別な氣立の人も有るんですよ。

ゼールビイ夫人　だがギイナさん、私としちや何處迄も私の爲て參つた樣に爲るのが可いと思つてるんですよ。ですからエルレエの方でも隱立は爲ないんです。それが又二人の間の楔に成つてるんですね。今ぢや彼の方は私と一緒に成つて、子供の樣に打明けて話が出來るんですよ。以前には、一度も左樣云ふ機會がなかつたのです。まア考へて御覽なさい、あんな健康な、精力に充ちた方が、若い時から盛りの歳頃へ掛けて、毎日お談義ばかり聞かされて來たと云ふんですもの！　それに其のお談義が時に據つては

根も葉もない當推量から始まるんだ相ですものね――私は左樣思つてるんですよ。

ギイナ　そりや眞個左樣でした。

グレーゲルス　貴方がたお二人でそんな話を爲さるんなら、私は何處かへ參りませう。

ゼールビイ夫人　いえ、其事なら、それには及びませんよ、私は最う一言も言ひますまい。ですが、これだけは貴方に聞いて置いて頂きたいんですよ、私は一つとして內密で爲たり、又後暗いやうな手段を執つたおぼえは無いんですからね。何だか私が大變好い事でもして居るやうで、又或意味では、それが本當でも有るんですがね。要するに、餘り得はして居ないんですよ。此後私は始終彼の方の側に隨いて居て、何一つ不自由のない樣に、誰にも眞似の出來ないやうな面倒を見て上げやうと思つて居るんですもの――今

に彼の方も手頼ない身に成るんですからね。

ヤルマア　手頼ない身とは？

グレーゲルス　（ゼールビイ夫人に向つて、）それを此處で言つては不可ない。

ゼールビイ夫人　幾許隱して置きたいと思つても、最う隱し切れませんよ。彼の方は盲目に成るんです。

ヤルマア　（飛立つ。）盲目に成る？　そりやア奇態だ。彼の人も盲目に成るんですかね！

ギイナ　世間には幾許も有りますよ。

ゼールビイ夫人　事業家が左樣成つたら如何成りますか。貴方にも想像がつくでせう。えゝ、私は私の眼が彼の方の眼の代りに成る樣に、飽迄遣つて見ますよ。ところで、最うお暇しませう。恰度今忙しいんですからね。——あゝ、それは左樣と、エークダルさん、私はかう言つて來る樣に吩咐かつ

て來たんですがね。若し何かヱルレエで間に合ふやうな事が有つたら、何卒グローベルクの方へ仰有つて下さる樣に——

グレーゲルス　そんな御親切は、ヤルマア君の方ではお禮を言つて斷りますよ。

ゼールビイ夫人　何ですッて？　これ迄そんな筈はないんですがねえ——

ギイナ　いえ、ベルタさん、エークダルは今後ヱルレエさんの御厄介に成らないことに極めたんですよ。

ヤルマア　（聲に力を入れて、緩やかに、）何卒未來の旦那に宜しく仰有つて下さい、私も近い間に一度グローベルクさんをお訪ねして——

グレーゲルス　なに？　君は實際そんな事を爲るのか。

ヤルマア　グローベルグさんをお訪ねして、御主人に拜借して居る金子の勘定をして頂くつもりだとお傳へ下さい。私もあの信用借りは拂ひますよ

――はゝゝ！　眞個信用借りに違ひないや！　兎に角、私は五分の利子を附けて悉皆拂ひますよ。

ギイナ　貴方、そんな事を仰有つても、迚もそんなお金子は出來ッこないぢや有りませんか。

ヤルマア　何卒未來の旦那に、私は側目も振らず發明にかゝつてると言傳して下さい。こんな苦しい仕事に夢中に成つてるのも、只あの借金の重荷を免れたいばかりだと言つて居たとね。それが爲に發明も續ける遣るのです。それから取る金子は悉皆貴方の旦那に對する前借の返濟に當てる決心ですよ。

ゼールビイ夫人　こりや何か有りましたね。

ヤルマア　仰有る通りです。

ゼールビイ夫人　では、左樣なら。ギイナさん、私は未だ貴方にお話したい

事が有つて參つたのですが、ま、此次にして置きませうね。左樣なら。

ヤルマアとグレーゲルス默つて頭を下げる、ギイナ戸口迄ゼールビイ夫人に隨いて行く。

ヤルマア　ギイナ、閾から外へ出ちや成らんぞ！

ゼールビイ夫人去る、ギイナ其後から戸を閉める。

ヤルマア　さア、グレーゲルス君、僕もやつと借金の重荷を心から卸したよ。

グレーゲルス　いづれ、今に左樣成るだらうよ。

ヤルマア　如何だらう、僕は自分の態度を正しいと思ふが。

グレーゲルス　僕は常に君を左樣云ふ人だと思つて居たよ。

ヤルマア　或場合には、『理想の要求』を顧みない譯に行かんからね。だが、一家の主人として、皆内の者を養つて行かなけりや成らぬ身で有つて見れ

ば、僕は隨分其爲めに苦しむことだらうよ。何しろ長い間其儘に成つて居て、言つて見りや、ま、塵埃で見えなく成つてるやうな借金を、無財産の人間が拂はうとするんだからね。眞個冗談ぢやないよ。併し何うも仕樣がない、僕も男の一分が立たんものな。

グレーゲルス（ヤルマアの肩に手を置いて、）如何だ、ヤルマア君、僕が遣つて來たのは徒爾ぢやなかつたらうね。

ヤルマア　うむ。

グレーゲルス　君は自分の地位が明かに成つたのを嬉しいとは思はんのかい。

ヤルマア（稍急き込んで、）うむ、勿論左樣思ふよ。だが、僕は此處に一つ如何しても僕の正義の觀念を刺擊するものが有るんだよ。

グレーゲルス　何だい、それは？

ヤルマア　それは君――だが、僕は君の阿父さんの事を左樣明けッ放しに言つて可いものか分らないね。

グレーゲルス　何でも言ひ玉へ、僕に遠慮することはないよ。

ヤルマア　ぢや言ふがね、所謂眞の結婚を實現する者は、僕でなくて、君の阿父さんだと思ふと、實際堪らないがね。

グレーゲルス　何故そんな事を言ふんだい？

ヤルマア　それが事實だから言ふのさ。君の阿父さんとゼールビイ夫人との結婚は、雙方の間に充分な信用と打明けた心とが有つて、其上に成立つたものぢやないのか。彼の二人は互に隱立もしなければ、背後に秘密と云ふものもない。二人の關係は、僕に言はせたら、相互の懺悔と釋罪の上に基礎を置くもんだね。

グレーゲルス　で、それが如何したんだい？

ヤルマア　それでお仕舞ひぢやないか。眞の結婚の土臺を築く上に是非共打勝たなけりや成らぬ困難はこれだと、君自身言つたんぢやないか。

グレーゲルス　だが、ヤルマア君、そりや全く別問題だよ。君だつて正可君や君の細君を彼の二人と比較する氣はないだらう？　ね、僕の言つてることは解るだらう。

ヤルマア　君が何と言つても、僕は此中に僕の正義の觀念を傷ける或物が有るとしか思へないよ。實際、僕には此の世に神も佛もない樣に見えるよ。

ギイナ　あゝ、貴方、そんな事を仰有つちや不可ませんよ。

グレーゲルス　ふむ、左樣云ふ問題には觸れないが可いね。

ヤルマア　だがね、これを要するに、僕も運命の支配を認める外はないよ。彼の人は盲目に成るんだらう。

ギイナ　あゝ、そんな事は解りや爲ませんよ。

ヤルマア　いや、それは疑ひないよ。少くとも疑ふものぢやないよ。何故と云ふに、其事實の中にこそ應報と云ふものが存在して居るのだからね。彼の人は曩に一人の罪のない同胞を盲目にした——

グレーゲルス　それが情ない事には、一人だけぢやないのよ。

ヤルマア　で、今や免れ難い、不思議な天命が廻つて來て、ヱルレエ自身の眼を奪はうとして居る。

ギイナ　まア、如何してそんな怖しい事を仰有るんですか。何だが怖く成りましたよ。

ヤルマア　時々人生の暗黑面を覗いて見るのも無益ぢやないよ。

（ヘードヰツヒ帽子と外套とを着て、廊下の戸口より入來る。何やら嬉し相に息を切らして居る。）

ギイナ　最う歸つて來たの？

ヘードヰッヒ　えゝ、何だか遠くへ行きたくなかつたんですもの。それからね、私入口で好い人に逢つたのよ。

ヤルマア　そりやゼールビイ夫人だらう。

ヘードヰッヒ　えゝ。

ヤルマア（彼方此方歩く。）あんな女には二度と逢はないが可いよ。

沈默。ヘードヰッヒ折角はづんで來た氣合を殺がれて、一人から一人の顏へ順々に眼を移しながら、其心の中を讀まうとする。

ヘードヰッヒ（傍へ行つて、甘ッたれた聲で、）阿父樣。

ヤルマア　うむ——何だな、ヘードヰッヒや？

ヘードヰッヒ　ゼールビイさんが私に好い物を買つて下さつたのよ。

ヤルマア（立停る。）お前に？

ヘードヰッヒ　えゝ。明日の贈物よ。

ギイナ　お前の誕生日には、毎でも何か知ら買つて下さるんだわね。

ヤルマア　何だい、そりや？

ヘードヰッヒ　いゝえ、今は言はないの。明日の朝、私が起きる前に、阿母さまが私に下さる筈なんだもの。

ヤルマア　毎でもかうしてお前達だけ承知してるんだね、私には隱して置いて？

ヘードヰッヒ（速かに、）いえ、御覽に成りたければ成つても可いんですよ。そりや大きな手紙なのよ。

外套の衣囊から手紙を取出す。

ヤルマア　手紙もかい？

ヘードヰッヒ　えゝ、手紙だけなの。他の物は後から屆くのでせうよ。ですが、ほら——手紙でせう？　私未だ手紙ッて一度も貰つたこと有りませ

んわ。あゝ『嬢』と書いて有つてよ。（讀む。）『嬢ヘードキツヒ　エークダルへ。』あら如何せう――私のことだわ！

ヤルマア　其手紙をお見せ。

ヘード井ツヒ　（それを父に渡す。）これなのよ。

ヤルマア　これはエルレエさんの手だね。

ギイナ　それに違ひないんですか、貴方。

ヤルマア　自分で御覽よ。

ギイナ　そんな物私に解ると思つて被坐しやるんですか。

ヤルマア　ヘードキツヒや、此手紙を開けて――讀んでも可いかい。

ヘードキツヒ　えゝ、可う御座んすとも、お讀みに成りたけりや讀んで頂戴な。

ギイナ　いえ、貴方、今夜は止めて、明日の事にして下さいませ。

ヘード井ツヒ　（小聲で、）ねえ、阿母さま、讀まして上げても可いでせう！屹度何か好い事に違ひないのよ。左樣すりや、阿父樣もお喜びに成るし、皆又氣が引立つわ。

ヤルマア　ぢや、開けても可いね。

ヘード井ツヒ　えゝ、可いわ。私それが何だか、早く知りたくツて仕樣がないのよ。

ヤルマア　宜しい。（手紙を破つて、一枚の紙を取出す。ずつと眼を通しながら、如何やら譯の解らないやうな樣子。）これは何だらう――？

ギイナ　何が書いて有るんですか。

ヘード井ツヒ　阿父樣、話して頂戴な。

ヤルマア　靜にお爲よ。（二たび讀直して顏色を變へたが、自ら抑制して、）ヘードキツヒや、これは贈物の約定證だよ。

ヘードキツヒ　左様？　私何を貰ふんでせう。

ヤルマア　自分でお讀みなさい。

（ヘードキツヒ燈火の傍へ行って、長い間かゝって讀む。）

ヤルマア　（拳を握りながら、半ば聲を上げて、）あの眼！――それから彼の手紙！

ヘードキツヒ　（手紙を讀み差して、）えゝ、ですが、それを貰ふのはお祖父様らしいのよ。

ヤルマア　（娘から手紙を取って、）ギイナ――お前にはこれが解るかい。

ギイナ　私は何も存じませんよ。全體如何云ふ事なんですか。

ヤルマア　ゼルレエさんがヘードキツヒに手紙を書いてね、お祖父さんは最う寫し物の様な骨の折れる仕事を爲るに及ばない、今後は事務所から一箇月に百クラウンづゝ引出しても可いと云ふんだよ。

グレーゲルス　あゝ！

ヘードキツヒ　阿母さま、百クラウンですッて！　私も讀みましたよ。

ギイナ　まアお祖父様は好い事だね。

ヤルマア　お祖父さんが入用の間、一箇月に百クラウン――と云ふのは、勿論生きてる間と云ふことだよ。

ギイナ　そんなに迄お祖父様はして貰へるんですかねえ。

ヤルマア　だが、未だ有るよ。ヘードキツヒ、お前は其處を讀まなかつたのだらう。其後で、此贈物はお前に讓るとして有るよ。

ヘードキツヒ　私に？　それを悉皆？

ヤルマア　此金額は生涯の間お前に與へると、ちやんと書いて有るよ。聞いて居るかい、ギイナ。

ギイナ　えゝ、聞いて居ます。

ヘードキツヒ　如何でせう――私が皆其のお金子を貰ふんですよ。（父を搖

振る。）阿父様、阿父様ッてば、貴方嬉しかアないの――？

ヤルマア（娘を避ける様にしながら、）嬉しいかッて？（歩き廻る、）おゝ解つた――何も彼も解つた。こんな手厚い恩恵も皆ヘードキッヒのためだ、ヘードキッヒに遣るのだ！

ギイナ　えゝ、彼の子の誕生日ですからね――

ヘード井ッヒ　ですが、矢張阿父様も貰ふんだわ！　私屹度阿父様と阿母さまに、皆其のお金子を上げてよ。

ヤルマア　阿母さまに、うむ！　ぢや私達も貰ふんだね。

グレーゲルス　ヤルマア君、それは君を陥入れる係蹄だよ。

ヤルマア　又別の係蹄だと云ふのかい。

グレーゲルス　今朝親父が此處へ來た時に言つて居たよ、ヤルマア　エークダルはお前が考へて居るやうな男ぢやないッて。

ヤルマア　――男ぢやない！

グレーゲルス　まア見て居れと親父が言つたよ。

ヤルマア　僕が金子で如何にでも成る男だと、左様言つたんだね――！

ヘード井ッヒ　阿母さま、皆如何したんでせうね。

ギイナ　彼方へ行つて、外套を脱いでお出で！

ヘード井ッヒ半分泣きながら臺所の戸を開けて出て行く。

グレーゲルス　左様だよ、ヤルマア君――さア親父と僕と、何方が正しいか見せて貰はうね。

ヤルマア（緩々と紙を二つに割いて、兩方の片を机の上に置いてから、偖て言ふ。）此處に僕の返辭がある。

グレーゲルス　僕の思つた通りだよ。

ヤルマア（暖爐の傍に立つて居るギイナの傍へ行つて、低い聲で言ふ。）さア何卒打明

けて呉れい。お前が――私を思つて呉れる様に成つた時にだね、お前の言つた通りに言ふんだよ、其時お前と彼の人との關係がさつぱり斷れて居たとすりや、何と思つて彼の人は私達を結婚させる様にしたんだい？

ギイナ　そりや私達の家へ自由に出入りを爲やうと思ひなすつたからでせう。

ヤルマア　それだけかい。或一つの差迫つた結果を恐れたからぢやないのか。

ギイナ　そんな事仰有つても、私には解りませんよ。

ヤルマア　お前の子供は私の屋根の下に生活する權利が有るか――それが聞きたいのだ。

ギイナ（身を緊める。眼は輝く。）貴方がそれを訊くんですか。

ヤルマア　これだけは返辭を爲せなきや置かんぞ。ヘードキツヒは私の子

か――それとも？　さア！

ギイナ（冷やかな捨鉢の氣味で、相手を見詰めながら、）私は知らない。

ヤルマア（少し震へながら、）お前が知らない？

ギイナ　如何して私が知つて居ませう？　私の様なものが――

ヤルマア（靜に、女の方へ背を向けて、）それぢや、私は最う此家に用はないんだ。

グレーゲルス　ヤルマア君、如何したと言ふんだ！　好く考へた上に爲なきや不可んぞ！

ヤルマア　斯う成りや、僕の様な男に二度と考へて見る必要はないさ。

グレーゲルス　いや、考へなくちや成らぬことは幾許でも有る。君が自己を犧牲にして他を許すと云ふ、眞の精神に到達しやうと思へば、君等三人は何時迄も一緒に居なきや不可ないよ。

ヤルマア　僕はそんな精神には到達しないよ。決して、何んな事が有つても！帽子は何處へ行つた！（帽子を取る。）グレーゲルス君、僕は一人も子供はないよ！

ヘード井ツヒ　（臺所の戸を開けて見て居たが、）何故そんな事を仰有るんです？（傍へ來て、）阿父様、阿父様！

ギイナ　それ御覽なさい！

ヤルマア　傍へ來ちや不可ない！　彼方へ行つて居れ。私はお前を見るに忍びないよ。あゝ！　此眼が――！　左様なら。（戸口の方へ出て行かうとする。）

ヘード井ツヒ　（縋り縋り附いて居ながら、聲を上げて叫ぶ。）可厭ですよ、〳〵！行つちや不厭ですよ！

ギイナ　子供を見て下さい、貴方！　子供を見て遣つて下さい！

ヤルマア　可厭だ！　私にや出來ない！　私は出るよ――こんな所には居

られん！

ヘード井ツヒを振ぎ離して廊下の戸口から出て行く。

ヘード井ツヒ　（失望の眼もて眺めながら、）阿父様が行つて仕舞ひなすつた、阿母さま！　私達を捨てゝ行つて仕舞ひ――！　最う二度と歸つて被入しやらないんですよ！

ギイナ　お泣きでないよ、ヘードキッヒや！　阿父様は屹度又歸つて見えるからね。

ヘードッ井ヒ　（啜り泣きしながら、長椅子の上に身を投げて、）いえ〳〵、阿父様は最う自宅へ歸つて被入しやらないんですよ。

グレーゲルス　奥さん、僕がこんな事を爲たのも、皆好くしたいと思つたからですよ。左様思つて下さいますか。

ギイナ　えゝ、そりや左様でせうよ。ですが、それにしても、私は知らな

い。

ヘード井ツヒ　（長椅子の上に倒れたまゝ、）あゝ、私は死ぬ！　私は阿父様に如何爲たらう？　阿母さま、最一遍阿父様を連れて來て下さい！

ギイナ　あゝ可いよ、〳〵。だから靜にして被坐しやい、今行つて捜して來るからね。（外出の用意をする。）屹度レリングさんの許へ被行したんだよ。だが、お前そんな所に寢て泣いて居ちや不可ないよ。ね、可いかい。

ヘード井ツヒ（泣き吃逆をしながら、）えゝ、最う泣かないわ、阿父様さへ歸つて下されば！

グレーゲルス（出て行かうとするギイナに向つて、）矢張、抛つて置いて、飽迄此苦痛と戰はして遣つた方が好かア有りませんか。

ギイナ　えゝ、そりやア後でも出來ますよ。差當つては、此子の心を鎭めて遣るのが肝心ですからね。

廊下の戸口を出て行く。

ヘード井ツヒ（坐り直して、涙を拭く。）ねえ、貴方、如何云ふ譯だか聞かして下さいませんか。阿父様は如何して最う私が要らないんでせう？

グレーゲルス　貴方が大きく成る迄、そんな事を訊くもんぢや有りません——大人に成る迄、ね。

ヘード井ツヒ（啜り泣く。）だつて、こんな事、大きく成る迄辛抱して居られないんですもの——私何だか解つてるやうな氣もしますわ。——如何かすると、私阿父様の子ぢやないのかも知れないのよ。

グレーゲルス（不安げに、）如何して左樣なんです？

ヘード井ツヒ　阿母さまが何處かで私を目附けて來たのかも知れないわ。それを阿父樣が今始めて御承知に成つたのでせう。私何だかそんな話を讀んだことが有つてよ。

ゲレーゲルス　で、若し左様だつたとしたら――

ヘード井ツヒ　それだつて、同じ様に私を可愛がつて下すつても可いわ。

え、、最つとでも可いのよ。私達は鴨を贈物に貰つたのでせう。それでも私はあんなに可愛がつて居るぢや有りませんか。

ゲレーゲルス（會話を轉ずるとて、）あゝ左様だ、鴨が居ましたね。些と鴨の話をして下さいな。

ヘード井ツヒ　可哀相ですわね！　阿父様は最うあれも見て遣らないんだつて。如何でせう、今にも頸を拈らうと爲たのよ。

ゲレーゲルス　いや、そんな事は被爲らないでせう。

ヘード井ツヒ　え、、でも左様爲ると仰有つたのよ。そんな事仰有るのは、阿父様も酷いわねえ、だつて私は毎晩お祈禱を上げて、鴨が死なない様に、病氣にも罹らない様に願つて居るんですもの。

ゲレーゲルス（相手を見詰めながら、）貴方は毎晩お祈禱をするの？

ヘード井ツヒ　え、。

ゲレーゲルス　誰に教へて貰つたの？

ヘード井ツヒ　一人でおぼえたんです。何日か阿父様が大變惡かつて、蛭を頸に喰附かせたことが有つたのよ。阿父様は最う死に相だつて言つてらしたわ。

ゲレーゲルス　成程？

ヘード井ツヒ　それで、私は床へ這入るたんびに、阿父様のためにお祈禱を上げたのよ。それからずつと續けてますの。

ゲレーゲルス　で、今も鴨のためにお祈禱をするんですね。

ヘード井ツヒ　え、、鴨のことも祈つて遣るのが一番好いと思つたんですもの。だつて、最初は本當に弱かつたんですよ。

ゲレーゲルス　朝もお祈禱をするんですか。
ヘードヰッヒ　いゝえ、爲ませんとも。
ゲレーゲルス　何故朝は爲ないの？
ヘードヰッヒ　朝は明るいでせう、何も別に怖かァないわ。
ゲレーゲルス　で、阿父さんは貴方がそんなに可愛がつてる鴨の頸を拈らうとしたんですね。
ヘードヰッヒ　いえ、只頸を拈つて遣りたいと言つたのよ。けど私が可哀相だから助けて呉れたんですわ。阿父様も親切だわねえ。
ゲレーゲルス　（一歩傍へ近いて、）だが、貴方が、阿父様のために自分から進んで鴨を犧牲にするとしたら——
ヘードヰッヒ　（立上りながら、）鴨を！
ゲレーゲルス　阿父様のために、世界中で貴方の一番大切なものを犧牲に

する氣は有りませんかい。
ヘードヰッヒ　左様すると、如何か成るんですか。
ゲレーゲルス　まア試つて御覽なさい。
ヘードヰッヒ　（眼を耀かしながら、小さい聲で、）えゝ、私試つて見ませう。
ゲレーゲルス　實際、それだけの勇氣が有るんですか。
ヘードヰッヒ　お祖父様に賴んで、私の代りに鴨を打つて貰ひますわ。
ゲレーゲルス　うむ、左様なさい。だが阿母さんには默つてなきや不可ませんよ。
ヘードヰッヒ　何故？
ゲレーゲルス　阿母さんには解らないからね。
ヘードヰッヒ　鴨！　明日の朝早く試つて見やう！
ギイナ廊下の戸口より入來る。

ヘード井ツヒ（傍へ行って、）阿母さま、阿父様は見附かりましたか。

ギイナ　いゝえ、だが阿父様はレリングさんの許へ寄つて、一緒にお出に成つたさうだよ。

グレーゲルス　本當に左樣ですか。

ギイナ　えゝ、門番の主婦さんが左樣言つてました。モルキツクさんも一緒に出たんだ相ですよ。

グレーゲルス　今夜の樣な、あの男に取つては、飽迄孤獨の中に戰はなきや成らぬ時に——

ギイナ　（いろんな物を脱つて、）えゝ、男てえものは倚賴に成らんものですよ、一體レリングさんは何處へ引張つて行つて呉れたんだらうね。エリクゼンの主婦さんの許迄驅出して行つて見たんですけど、其處には居ないんですものね。

ヘード井ツヒ（一生懸命に泣くまいとしながら、）おゝ、阿父様が本當に歸つて見えなんだら、私は如何せう！

グレーゲルス　阿父樣は歸つて見えますよ。明日私が連れて來ませう、まア何んな風に成つて歸つて來るか見て被坐しやい。ヘードキツヒさん、今夜は安心して、悠くりお臥みなさいよ。左樣なら。

廊下の戸口から出て行く。

ヘード井ツヒ（ギイナの頸に身を投げ掛けて、啜り泣きしながら、）阿母さま、阿母さま！

ギイナ（娘の肩を撫でて、溜息を吐く。）あゝ左樣だ、眞個レリングさんの言ふ通りだ。あんな氣狂ひ染みた人達に、何やら陳粉漢の要求を振廻して歩かれちや、何うせこんな事に成るんだよ。

第五幕

ヤルマア　エークダルの技術室

寒さうな、灰色の朝の光。斜めに成つた天窓の大きな硝子板の上に、ぽつたりした雪が横たはつて居る。

ギイナ西洋前掛を當て、箒と塵拂ひを持ちながら、臺所から出て來て、居間の戸の方へ行かうとする。途端に、ヘード井ツヒが廊下から遽てゝ這入つて來る。

ギイナ　（立停つて、）何だえ？

ヘード井ツヒ　ねえ、阿母さま、阿父様は何うも階下のレリングさんの室に被坐しやるらしいのよ。

ギイナ　それ御覽なさい

ヘード井ツヒ　門番の主婦さんがね、レリングさんは昨夜二人男の人を連れて戻つて來たらしいつて、左様言つてましたよ。

ギイナ　矢張私の思つた通りだ。

ヘード井ツヒ　だつて自宅へ歸つて來るのが可厭なら、矢張何處かへ行つてお仕舞ひ成さるわ。

ギイナ　兎に角、階下へ行つて會つて來ませう。

老エークダル寐卷を着て、上靴を穿きながら、煙管を喞えて自分の室の戸口に現はる。

エークダル　ヤルマア――ヤルマアは自宅に居ませんか。

ギイナ　えゝ、お出掛けですよ。

エークダル　こんなに早くから？　此の怖しい雪降りに？　うむ〳〵、心配せんが可い。俺は一人で散歩するよ。

と、屋根裏の室の戸を側へ開けやうとする。ヘード井ツヒ手傳ふ。中へ這入る。後からそれを閉める。

ヘード井ツヒ　阿母さま、お祖父様が、阿父様の行つてお仕舞ひに成つた

ことをお聞きでしたら、如何被成るでせうねえ。

ギイナ　馬鹿な、お祖父様にそんな事少しでも言つちや不可ませんよ。まア昨日の騒ぎに、自宅にお坐でなかつたのは、何んなに仕合だか知れやしない。

ヘード井ツヒ　えゝ、ですが——

グレーゲルス廊下の戸口により入來る。

グレーゲルス　其後ヤルマア君の居所は分りませんか。

ギイナ　何でもレリングさんの室に居ると云ふことですよ。

グレーゲルス　レリングの室に？　矢張あんな奴等と一緒に歩いてたんですね？

ギイナ　えゝ、左様らしいんです。

グレーゲルス　彼の男は飽迄孤獨に堪へて、眞面目に自己の問題を考へて

見なきや成らぬ時なんだが——

ギイナ　えゝ、貴方の仰有る通りですよ。

レリング廊下より入來る。

ヘード井ツヒ（傍へ駈けて行つて、）阿父様は貴方の室に被坐しやいますか。

ギイナ（同時に、）彼處に居るんですか。

レリング　勿論居られます。

ヘード井ツヒ　それで私達に知せて呉れないんですね！

レリング　うむ、私は畜生だよ。だが私は先づ最一人の畜生を世話しなきや成らんのだからね。なに勿論あの惡魔の野郎のことですよ。左様してる間に、私も寢ちやつた、何も彼も知らずに——

ギイナ　エークダルは今日何と言つてますか。

レリング　何も言ひませんよ、何も。

ヘード井ツヒ　何も言はないんですッて？

レリング　只の一言も。

グレーゲルス　そりや言ふまい。僕には好く了解出來るよ。

ギイナ　でも、如何爲るんでせうね？

レリング　大鼾で長椅子の上に寢て居ますよ。

ギイナ　まア左樣ですか。彼の人は本當に大きな鼾を搔く人ですからね。

ヘード井ツヒ　寢て？阿父樣が寢て居られるんでせうか。

レリング　うむ、何うも居られるものと見えるね。

グレーゲルス　そりやア自然だらう、あれだけ精神上の葛藤に勞れた後だからね——

ギイナ　それに夜戸外を迂路ついて廻ることなんざ、平生慣れて居ませんものね。

ヘード井ツヒ　阿父樣は少時お臥みに成つた方が可いんだわ、ねえ、阿母樣。

ギイナ　あゝ、左樣だよ。それから餘り早く起さない樣に氣を附けなきや不可ないよ。レリングさん、何うも有難う御座いました。それでは一寸室の掃除をして參りますからね。——ヘードキツヒや、さア來て手傳つてお呉れ。

ギイナとヘード井ツヒ居間へ這入つて行く。

グレーゲルス　（レリングの方へ向直つて）今エークダル君の頭の中に起つて居る精神上の動亂に對して、君の意見は如何ですか。

レリング　僕には彼の男に精神上の動亂なぞがあらうとは見えませんでしたがね。

グレーゲルス　なに！こんな一大事の際に、彼の男の生活が新しい土臺の

上に築かれやうと云ふ――？君は又如何してそんな事を言ふんです、ヤルマアだけの個性を持つた人間が――？

レリング　え、個性――あの男が？　彼の男は、縱しむば君が個性と云つてるやうな、變則な發展に對して、些と位傾向を持つて居たとしても、そんな物は疾くの昔二十才にも成らぬ前に根こそげ失くして居るんですよ。そりやア安心して被坐しやい。

グレーゲルス　若し左樣だとすると、可訝しいんですね――彼の男があれだけ大切にして育てられた教育の上から見ても。

レリング　彼の變人で、一代男を持たずに通したヒステリイ性の二人の叔母さんにでせう？　左樣ぢや有りませんか。

グレーゲルス　君に言ふがね、彼の叔母さん達は眞個理想の要求を忘れたことのない女でしたよ――だが、君は又僕を調戯つて居るんでせう。

レリング　いや、そんな氣は些とも有りませんよ。僕も彼の二人のことは好く知つてます。あの男が例の形容澤山な修辭法でね、『二人の魂の母』についちや、好く聞かされたもんですよ。だが、彼の男も左樣叔母さん達にお禮を云ふ筋はないでせう。エークダルの不幸は始終自分の周圍から明星の樣に思はれて來たと云ふ所に有るんですからね。

グレーゲルス　それにしたつて、決して理由のないことぢやないさ。彼の男の心の深さを見玉へ。

レリング　僕は一度も左樣云ふものを見たことが有りませんね。阿父さんが左樣信じて居るなア、別段不思議でもない。あの老中尉は昔から頓馬ですからね。

グレーゲルス　彼の人は昔から子供の樣な心を持つてるんですよ。それが君には解らないんだ。

レリンゲ　ふむ、左樣して置くさ。兎に角、好男子ヤルマア君は大學に入るや否や、又仲間の中で將來有爲の靑年を以て目せらるゝに至つた。彼奴が又一寸綺麗だからね――のつぺりして――若い女の子には持てまさアね。それに彼の感動され易い性質と、同情を惹くやうな聲だね。あれで他人の作つた詩を歌はせたり、他人の思想で演說でもさせやうものなら實際旨いものだからね。

グレーゲルス　（憤然として）君はそりやヤルマア　エークダルのことを言つてるのか。

レリンゲ　お氣に觸つたら御免なさい。だが、貴方があんなに匐ひつくばつて崇拜しとられる偶像の正體は、實際そんな物ですよ。

グレーゲルス　僕だつてそれ程盲目ぢやない積りだ。

レリンゲ　いや、そりや不思議でも有りませんや。元來、貴方も病人だから

ね。

グレーゲルス　其點は君の言ふ通りだ。

レリンゲ　うむ、貴方の場合は一層こんぐらがつて難かしいよ。第一、貴方には完全熱と云つて容易に癒らない熱病がある。それから――最つと不可ないのは――貴方は始終英雄崇拜の狂態に罹つてお坐だ。自分以外に、何か知ら始終崇拜するものを持つて居なきや成らないと云ふ、厄介な代物だからね。

グレーゲルス　左樣です、僕は確にそれを自分以外に求めなきや成らない。

レリンゲ　だが、貴方は自分で其鳳凰を發見したと思ふたンびに、每でも飛んだ間違ひをしてるんですよ。貴方は又理想の請求書を持つて職人の小舍へ遣つて來たが、此家にや一人も拂ひの出來るやうな人間は居ませんよ。

グレーゲルス　君はヤルマア　エークダルをそれ以上に思つて居ないのな

ら、如何して始終そんな人間と交際つて居られるんですかい。

レリンゲ　なに、僕はこれで醫者と思はれてますからね――豪儀でせう！

同じ屋根の下に病人が有りや手を貸す外はないぢや有りませんか。

グレーゲルス　何ですツて！エークダルも病人だと云ふんですか。

レリンゲ　大抵の人間は皆病人でさ。

グレーゲルス　で、ヤルマアの病氣には、何んな療法を用ひて居られるんです？

レリンゲ　毎も僕の使ふ手ですよ。彼の男の人生に對する嘘を助長して遣るのです。

グレーゲルス　人生――の嘘？　左樣言はれたんですね？

レリンゲ　左樣です、嘘と言ひました。此嘘と云ふ奴は御承知の通り却々好く利く藥劑ですからね。

グレーゲルス　それぢやヤルマア君は何んな嘘を注射されて居るんですか、それを伺ひたいものですね。

レリンゲ　いや、そりや不可ません。僕も藪醫者に職業上の秘密は洩しませんよ。貴方は又屹度交ぜッ返して、餘計に惡くしちやひますからね。だが其療法は間違ひッこ有りませんよ。僕は最うモルヒックにも適用したのです。彼の男を『惡魔』にして遣りました。それが彼の男の頸に貼つて遣つた發泡膏ですよ。

グレーゲルス　それぢや彼の男は實際惡魔ぢやないんですか。

レリンゲ　惡魔と云ふなア何んな魔のことですか。そりやア只僕が彼の男の生命を些とでも取留めて遣らうと思つて、發明した手妻の手ですよ。左樣でもしなけりや、あの人の好い男は疾ッくの昔自暴自棄で死んで居る所ですからね。それから彼の老中尉ですよ。だが、彼の人は旨く自分で自分

の療法を目附けたものですね。

グレーゲルス　エークダル中尉？　彼の人が如何したんですか。

レリング　まア考へて御覽じろ、昔は熊狩もしたと云ふ老人が、彼の薄暗い屋根裏に閉籠つて兎を追ひ廻してるんですせ！　世の中にあれより幸福な銃獵家はないでせうね――あの瓦落駄の中をよた〳〵歩いてる老人に比べてですよ。四本か五本の枯れた基督降誕祭の樹をたばつて置きや、それが彼の人にはヘエダルの大森林の代りをするんですからね。牝雞や雞牡が樅の梢の大きな獲物なら、床の上を飛び廻つてる兎は却々骨を折らせる熊でさ――飛んだ大銃獵家が出來上つたもんだ。

グレーゲルス　眞個可哀相な老人ですよ。彼の人も若い時の理想を狹めなくちや成らんのですからね、成程！

レリング　ヱルレエの若旦那、僕が此話をしてる間は、そんな『理想』なん

て云ふ外國の言葉は使はずに置いて下さい。『嘘』と云ふ立派な言葉がちやんと本國にも有るんですからね。

グレーゲルス　君は其二つが同じ物だと言ふんですか。

レリング　左樣です、窒扶斯とマラリヤ位の關係は有りまさアね。

グレーゲルス　レリングさん、僕は君の手からヤルマア君を救ひ出す迄は屈服しませんよ。

レリング　そんな事を爲や一層惡く成るばかりでさ。水平線以下の人間から人生の嘘を奪つて御覽なさい、立所に其男の幸福を奪ふやうなものですよ。（居間から出て來たヘードヰッヒに向つて）いや、鴨の小さい阿母さん、僕はこれから行つて、阿父さんが未だ寢たまンまで、彼の驚くべき大發明を考へて居るか見て來やうと思つてる所です。（廊下の戸口から出て行く。）

グレーゲルス　（ヘードヰッヒに近づく。）　貴方の顏附ぢや未だあれを爲ません

ね。

ヘードヰツヒ　何ですか。あゝ、彼の鴨のこと？　いゝえ。

グレーゲルス　いよ〳〵の場に成つて勇氣が失せたのでせう？

ヘードヰツヒ　いえ、左樣ぢや有りません。ですが、今朝起きて、昨夜話したことを考へて見ると、何だか變ですものね。

グレーゲルス　變だとは？

ヘードヰツヒ　えゝ、何だか知らないけれども――　昨宵、あの話をした時は、左樣すると非常に好い事が有る樣に思つたんですよ。ですが、一晩寢て、最一度考へ直して見ると、そんな事しても何だか詰らないやうな氣がするんですもの。

グレーゲルス　勿論、貴方も此家では何一つ失はずに育つ譯にや行かなかつたらうね。

ヘードヰツヒ　尤も、阿父樣さへ歸つて來て貰へたら、そんな事如何でも可いんですけど――

グレーゲルス　貴方が此人生の價値を與へるものに眼を開きさへしたら、貴方が怖るゝ所なく喜んで自己を犧牲にするやうな、眞の精神を持つてお坐なら、何んな風に成つて阿父樣が歸つて來られるか、今に見られるでせう。――ヘードヰツヒさん、私は未だ貴方を信じて居ますよ。

グレーゲルス廊下の戸口より出て行く。

ヘードヰツヒ少時の間室の中を彷ふ。やがて臺所へ這入らうとした時、屋根裏の戸を叩く音聞ゆ。そこへ行つて、少し開けて遣る。老エークダルが出る。二たび其戸を押して閉める。

エークダル　ふむ、散歩も一人で爲ては餘り面白くないよ。

ヘードヰツヒ　お祖父樣、最う獵は爲さらないの？

エークダル　今日はそんな日ぢやないよ。彼處は暗くて、何處へ足を踏み

込んで可いか分らない位だよ。

ヘード井ツヒ　お祖父様は兎の外何もお打ちに成らんのですか。

エークダル　兎で澤山ぢやないかね。

ヘード井ツヒ　えゝ、だけど鴨なんかは如何？

エークダル　ほッほ！　俺が鴨を打ちやしないかと心配するのか。いや、決して、決して打つこッちやないよ。

ヘード井ツヒ　左樣、お祖父樣には打てないんでせう。だつて鴨を打つのは艱かしいと云ふことですもの。

エークダル　打てない？俺には打てるよ。

ヘード井ツヒ　ぢや、お祖父樣、如何して打つの？――私の鴨のことを言つてるんぢや有りません、他所の鴨のことですけれど。

エークダル　俺は先づ胸を覗ふ樣にするよ、彼處が一番確かだからね。そ

れから羽翼の所を打つが可い――勿論羽翼を打つんぢやないがね。

ヘード井ツヒ　左樣すると死にますか、お祖父樣。

エークダル　うむ、そりやア死ぬとも――ちやんと打ちさへすればね。所で、俺は顏を洗つて來なくちや成らぬ。ふむ――解つたかい――ふむ。

自分の室く這入つて行く。

ヘード井ツヒ少時待つて、一目居間の戸の方を見遣つたが、本箱の傍へ行つて爪先で立ちながら、棚から二連の短銃を卸して、それを眺めて居る。ギイナ箒と塵拂ひを持つて、居間から出て來る。ヘードキツヒ遽てゝ氣附かれぬ樣に短銃を元の所に置く。

ギイナ　ヘードキツヒや、そんな所に立つて、阿父樣の何でか弄るぢや有りませんよ。

ヘード井ツヒ　（本箱の前を去つて、）只一寸お掃除をしやうと思つたんですよ。

ギイナ　臺所へ行つて、咖啡が沸いたか見て被入しやい。阿母さんは階下へ阿父樣を見に行く時、朝飯を盆に載けて持つて行きますからね。

ヘード井ツヒ去る。ギイナ技術室の掃除を始む。間もなく。廊下の戸をおづ〳〵開けて、ヤルマア　エークダルが覗く。外套は着てるが、帽子は被つて居ない。未だ顔も洗はぬと見えて、髪は亂れ、櫛の痕も見えない。眼は鈍く重ッ苦しい。

ギイナ　（手に箒を持つて立つたまゝ、ヤルマアの顔を眺めながら、）あゝ貴方――到頭歸つて來て呉れましたわね。

ヤルマア　（這入て來て、調子のない聲で答へる。）歸つて來たが――直に又出て行くよ。

ギイナ　えゝ〳〵、私も左樣思ひましたよ。ですがまア！　貴方の格好は如何でせう！

ヤルマア　何んな格好だい？

ヘード井ツヒ　（臺所の戸口で、）阿母さま、一層彼樣した方が――？（ヤルマアを見て、一聲高く喜びの叫びを上げながら、走つて縋り着く。）あゝ阿父樣、阿父樣？

ヤルマア　（外方を向いて、可厭だと云ふ身振をする。）彼方へ行け、〳〵！（ギイ

ナに向つて。）おい、此子を彼方へ連れて行け！

ギイナ　（低い調子で、）ヘードキッヒや、お居間へ行つてらつしやい。

ヘード井ツヒ默つて這入つて行く。

ヤルマア　（がた〳〵と卓の抽斗を開ける。）本を持つて行くんだ。本は何處に有るか。

ギイナ　何んな本です。

ヤルマア　勿論、科學の本だよ。毎も發明に使つてた專門の雜誌だよ。

ギイナ　（本箱の中を搜す。）紙表紙の本ですか。

ヤルマア　うゝ勿論だ。

ギイナ　（卓子の上に雜誌を渦高く載せる。）ヘードキッヒを喚んで紙を切らせませうか。

ヤルマヤ　なに、切つて貰はなくッたつて可いよ。

短かき沈默。

ギイナ　ぢや貴方は未だ私達を捨てる積りで被坐しやるんですね。

ヤルマア　（本の中を搔き搜しながら、）勿論、そんな事は言ふ迄もないんだ。

ギイナ　左樣ですか。

ヤルマア　毎日、一時の休みもなく、心の奥迄突刺されるやうな思ひをして、如何してこんな所に居られるんだい？

ギイナ　そんなに私を惡く思つてらつしやい！

ヤルマア　ぢや、證明を立て——

ギイナ　證明を立てるのは貴方ですよ。

ヤルマア　お前の樣な過去を持つて居ながら？　あゝ此處に、要求が有る——殆ど理想の要求と言つても可い程の要求が有る——！

ギイナ　ですが、お祖父樣を如何爲さいます？

ヤルマア　自分の爲べき事は知つてるよ。阿父樣は俺が連れて行くさ。俺は町へ出て開業する心算なんだ——　ふむ——（躊躇しながら、）梯子段で俺の帽子を拾つたものはないか。

ギイナ　いゝえ。帽子を失くしたんですか。

ヤルマア　昨夜歸つて來た時はちやんと被つて居たんだ。そりやア確かなんだ。それが今朝に成つて見附からない。

ギイナ　まア如何したんです。あんな人達と一緒に何處へ行つたんです？

ヤルマア　何だ、詰らない事を愚圖々々言ふな。俺が今そんな事を一々覺えてるやうな氣持で居ると思ふのかい。

ギイナ　いえ、只貴方がね、お風邪でも召さなきや可いと思つて心配するんですよ。

臺所へ出て行く。

ヤルマア　（机の抽斗を打明けながら、苛々した低い調子で一人言を言ふ。）貴様は悪い奴だ、レリング！――眞個厚顔しい野郎だぞ！――ぬけ〳〵と俺を誘き出しやがつて――本當に、誰か賴んで打殺して遣りたいや！

若干の古手紙を傍へに置く。昨日の裂けた證文を見附けて、それを取上げたまゝ、凝乎と見て居たが、ギイナの這入つて來たのを見て、遽てゝ下に置く。

ギイナ　（咖啡其他の物を載せた盆を卓の上に置いて、）召上るかと思つて、暖い物を一杯持つて參りました。麪包に牛酪、鹹肉も少許は有りますよ。

ヤルマア　（一目盆を見遣りながら、）鹹肉だ？　いや、此家ぢや何も喰ふまい！俺は此二十四時間と云ふもの、實際固形物は何一つ口にしないんだ。が、それでも構はない。――俺の備忘錄は！俺の自叙傳の始まりは！俺の日記や、其外の重要な書類は如何したんだい？　（居間の戸を開けたが、後ろへ退る。）又彼處に居るんだね。

ギイナ　何です！　彼の子だつて何處かに居なきや成りませんよ！

ヤルマア　出て來い。

と、身を開く。ヘードヰツヒ戰々しながら技術室に入り來る。

ヤルマア　（戸の把手に手を掛けながら、ギイナに向つて言ふ。）俺も此家には最う二三分しきや居ないんだ。切めて其間だけでも、他人の顔は見せて貰ひたくないね。

室の中へ行く。

ヘードヰツヒ　（母の方へ飛んで行つて、震へながら、）私の事でせうか。

ヤルマア　臺所へ行つてらつしやい。いや、それよりか自分のお室に被坐しやい。（ヤルマアに隨いて居間へ這入らうとしながら、耳人に向つて言ふ。）一寸お待ちなさい、そんなに抽斗を搔廻さんでも可いでせう。何んでも在る所を私が知つてますよ、

ヘード井ツヒ　（泣くまいとして唇を噛みながら怖しいのと如何して可いか譯が分らないのとで、須臾立つたまゝ動かずに居る。やがて痙攣的に拳を握り緊めながら、小聲で言ふ。）
鴨！
窃と近づいて、棚から短銃を取る。屋根裏の戸を少許開けて、にぢり込み、其後から又戸を閉める。ヤルマアとギイナの爭ふ聲が居間の中から聞ゆ。
ヤルマア　（若干の手寫した書物とばら〳〵に成つた書類とを持つて來て、それを卓の上に置く。）其革鞄ぢや仕樣がない！持つて行かなきや成らん物は、山の樣に有るからね。
ギイナ　（革鞄を持つて續きながら、）如何して？　今日は襯衣一枚と洋袴下だけ持つてらして、他の物は當分殘して被行したら可いぢや有りませんか。
ヤルマア　ふう——！　何うも骨が折れるね。（外套を脱いで、長椅子の上へ抛つて遣る。）
ギイナ　珈琲が冷えますよ。

ヤルマア　ふむ。（一口氣が附かずに飲む、又一口飲む。）
ギイナ　（椅子の脊を拂ひながら、）これだけの兎を入れて置けるやうな、大きな屋根裏を見附けるのは、何より骨でせうよ。
ヤルマア　なに？　こんな兎も皆連れて行けと言ふのか。
ギイナ　だつて、お祖父樣は兎がなけりや一日も居られないでせう。
ヤルマア　彼の人もそんな物はなしで辛抱するさ。俺の方は兎なんぞよりずつと大きな物を犧牲にして居るんだからね。
ギイナ　（本箱を拂ひながら、）あの笛を革鞄の中へ入れて置きませうか。
ヤルマア　いや、笛なんか要らない。其代りに彼の短銃を呉れい！
ギイナ　短銃を持つてらつしやるの？
ヤルマア　あゝ、あの彈丸を込めた短銃だよ。
ギイナ　（それを搜しながら、）有りませんよ。お祖父樣が持つてらしたんで

せうね。

ヤルマア　屋根裏に被坐しやるのかい。

ギイナ　えゝ、屋根裏ですよ。

ヤルマア　ふむ――氣の毒な老人だなア。

麪包と牛酪の片を取つて喰ふ、咖啡の入つた茶碗も飲んで仕舞ふ。

ギイナ　彼の室を貸さないで置くと、彼處へお移りに成つても可いんですわね。

ヤルマア　そして、お前達と同じ屋根の下に住むのかい！　いや――いゝや！

ギイナ　でも、一日や二日は彼の居間で御辛抱出來ませんか。貴方一人で、誰も傍へ行きやしませんよ。

ヤルマア　此家の中にや居ないよ。

ギイナ　それぢや、階下でレリングさんやモルギックさんと御一緒でも。

ヤルマア　あんな奴等の名も私に言つて呉れるな。彼奴等のことを考へるだけでも食慾が失せるよ。――　あゝいや、私はこれから雪吹雪の中へ出て――軒から軒へ尋ね廻つても、阿父さんと私と、二人が雨風を凌ぐだけの室を捜して來なきや成らんのだよ。

ギイナ　ですが、貴方は帽子がないでせう！　昨夜帽子を失くしたんぢや有りませんか。

ヤルマア　本當に彼ン畜生ども、仕樣がないなア！　帽子は買はなきや成らんよ。（又麪包と牛酪の片を取る。）兎に角、何か爲なきや成らない。私は是れで生命を捨てる氣はないからね。（盆の上に何物かを捜す。）

ギイナ　何ですか。

ヤルマア　牛酪だ。

ギイナ　直に取つて參りますよ。（臺所へ出て行く。）

ヤルマア　（ギイナの後ろから喚ぶ。）あゝ最う可いんだよ。乾いた麪包で澤山だからね。

ギイナ　（牛酪の皿を持つて來て、）一寸御覽なさい。これは新しいんですよ。最一杯咖啡を注いて遣る。ヤルマア長椅子に腰を卸して、既に牛酪を塗つた麪包に又塗り直しながら、少時の間默つて飲み且つ喰ふ。

ヤルマア　私は誰にも邪魔をされずに——全く誰にもだよ——一日か二日居間に置いて貰ふことは出來るかい。

ギイナ　えゝ、そりや貴方さへ可けりや、お坐なさいましとも。

ヤルマア　こんなに急いぢや、迚も親父の物を悉皆持出す譯には行かんからね。

ギイナ　それに何でせう、貴方は先づ、これから先き私達と一緒に住む氣

ぢやないと云ふことを、彼の方に話さなきや成らんでせう。

ヤルマア　（咖啡の茶碗を傍へに押遣つて、）うむ、それも有る。私は此のこんぐらがつた事情を彼の人の前に明かにしなきや成らん——最一度此事件を檢べて見なきや成らんのだよ。それには息を吐く時間も欲しい。私もこれだけの重荷を一日にや背負ひ切れないからね。

ギイナ　それに、殊更今日はこんなお天氣ですものね。

ヤルマア　（エルレエの手紙に手を觸れながら、）あの證文は未だ彼の儘にして有るんだね。

ギイナ　えゝ、私は觸つても見ませんでしたよ。

ヤルマア　私にや、こんな物は只の紙も同然なんだ——

ギイナ　そりや、私だつてそれを用に立てやうとは思つて居ません。

ヤルマア　——だが、矢張失くなさない樣にして置いた方が可いね。——

引越でもして、ごたぐ〜すりや、つい失く成り易いからね。

ギイナ　私が預つて置きませう。

ヤルマア　宛名は實際阿父さんなんだから、これを受取るも受取らないも、彼の人の一存に有るんだよ。

ギイナ　（溜息を吐く。）あゝ、あの氣の毒なお祖父様——

ヤルマア　そこで用心の爲に——糊は何處に有つたい。

ギイナ　（本箱の傍へ行つて、）此處に糊壺が有りますよ。

ヤルマア　刷毛は？

ギイナ　刷毛も此處に有りますよ。

それ等の物を持つて來る。

ヤルマア　（剪刀を執つて、）裏に紙片を貼つて置くんだ——（剪つて貼る。）いや最う何んな事が有つても、自分の所有でない物に手を着ける事ぢやない

——殊に貧乏をしてる老人の物にだね。それから——最一人の何の物に——さア出來たぞ。少時其處に置いて、乾いたら其方へ持つて行つて呉れ。私は二度とそんな書類を見たいとは思はない。決して！

グレーゲルス　ヱルレエ廊下より入る。

グレーゲルス　（稍驚いて、）なに——ヤルマア君、君は此處に居たのか。

ヤルマア　（遽てゝ立上る。）僕は最う勞れて仕舞つたんだ。

グレーゲルス　朝飯を喫つてた樣だね。

ヤルマア　時には身體も何か欲しく成るだらうぢやないか。

グレーゲルス　君は一體如何するつもりなんだい？

ヤルマア　僕の樣な人間に取つては、行く道は一つしかないよ。今恰度重要な物だけ包んで居た所なんだ。だが、それも時間を要するからね、えゝ。

ギイナ　（いつそ怺え切れないと云ふ風で、）室の用意を爲ますか、それとも革

鞄を包みませうか。

ヤルマア　（困つたと云ふ樣に、一目グレーゲルスを見遣つた後、）あゝ包んで呉れ——それから室の用意もして呉れ！

ギイナ　（革鞄を取つて、）えゝ、宜う御座んす。それぢや襯衣や何かも入れて置きますよ。（居間へ這入つて、其後から戸を閉める。）

グレーゲルス　（短き沈默の後、）こんな事に成らうとは僕は夢にも思はなかつた。君は實際家を出る必要があるのかい？

ヤルマア　（せかゝと廻つて歩きながら、）君は僕が如何爲たら可いと言ふんだね。グレーゲルス君、僕は不幸に堪へられる人間ぢやないよ。僕は自分の周圍が平穩でなきや落着いて居られないんだよ。

グレーゲルス　だが、此家は平穩だと思はないのかい。まア遣つて見玉へ。僕から見や、君は今家を建てるに堅固な土臺を有つて居る——君が新たに

始めさへすりやだよ。それに、君は發明のために盡さなきや成らんのだらう。

ヤルマア　あゝ、最う發明のことは言つて呉れ玉ふな。そんな物は未だずつと遠方に有るんだよ。

グレーゲルス　何だつて？

ヤルマア　あゝ、それが如何したと言ふんだ、君は僕に何を發明させやうと言ふんだい？　大抵最う何も彼も他人が發明して居るよ。毎日だん〳〵困難に成るばかりだ——

グレーゲルス　それだのに、君はあんなに骨を折つて居たのかい。

ヤルマア　僕にそれを勸めて爲せたのは、彼のレリングの業突張だよ。

グレーゲルス　レリングが？

ヤルマア　左樣よ、最初僕に勸めて、何か寫眞術で大發明をするやうな計

畫を立てさせたのは、皆あのレリングだよ。

グレーゲルス　あゝ――レリングだつたのか？

ヤルマア　此事ぢや、僕は心から幸福に感じて居たもんだ！　勿論發明それ自身のためぢやない。只ヘードキッヒがそれを信じて居る――子供の生一本な心でそれを信じて居て呉れたもんだからね。少くとも僕は彼の子が信じて居ると思ひ詰めた程馬鹿なんだよ。

グレーゲルス　君は實際彼の子が君に對して嘘を言つてたと思ふのかい。

ヤルマア　僕は今やつと分つたんだ。僕の邪魔をするものはヘードキッヒだよ。彼の子が僕の生涯から日光を奪つて仕舞ふんだよ。

グレーゲルス　ヘードキッヒが！　君はそりやヘードキッヒのことを言つてるのか。彼の子が如何して君の日光を奪つて仕舞ふんだい？

ヤルマア　（それには答へず、）僕はそりや口では言へない程彼の子を愛して

居たもんだ。僕も亦自宅へ歸つて來て、彼の子が可愛らしい近眼をして、飛んで僕を迎ひに出るのを見るたンびに、何の位幸福に感じたか知れない。それ程僕はお人好しの馬鹿だつたんだよ。僕は口で言はれぬ程彼の子を愛した。其代りに彼の子も口で言はれぬ程僕を愛して呉れるもんだと、そんな夢を、そんな幻影を描いて居たんだよ。

グレーゲルス　君はそれを幻影だと言ふのか。

ヤルマア　僕が知るかい。ギイナに訊いたつて、何も分りやアせず、それに彼の女は此複雜した事件の理想的方面には全然盲目なんだからね。だが君には僕の心を打開けて聞いて貰ひたい。グレーゲルス君、僕は如何しても此の怖しい疑惑を去ることが出來ないがね――恐らくヘードキッヒは眞實僕を愛したことがないんぢやないかと――

グレーゲルス　ぢや、彼の子が君に對する愛の證據を見せたら如何するか。

（耳を歌てゝ聽く。）何だ、あれは？　鴨が如何かした樣だね？

ヤルマア　鴨が鳴いて居るんだよ。親父が屋根裏に居るんだ。

グレーゲルス　阿父さんが？　（其顏喜びを以て輝く。）おい、君は未だヘードキツヒが君を愛してる證據を見ることが出來る、彼の誤解された可哀相なヘードキツヒがだよ！

ヤルマア　何んな證據を見せるんだい？　あんな連中の言ふことは一つも信用が出來ないよ。

グレーゲルス　ヘードキツヒは未だ虛僞の何たるかを知らんのだ。

ヤルマア　グレーゲルス君、僕が不安に思ふのは其處だよ。ギイナとゼールビイ夫人とは何度此處に坐つて、こそ〳〵話をしたり、べちやくちや喋舌り合つた間柄だか知れないだらう。ヘードキツヒは毎も側に居て、ちやんとそれを聽いて居たんだよ。恐らく彼の贈物の約定證だつて、左樣不意

に來たもんぢやなからうと思ふんだ。實際、僕は左樣ぢやないかと思つた覺えも有るんだよ。

グレーゲルス　君は又如何してそんな心持に成つたんだい？

ヤルマア　僕は最う眼が開いたんだ。まア見て居たまへ。――あの約定證なんざほんの手始めなんだよ。ゼールビイ夫人は平常から大分ヘードキツヒを好いて居たからね。それに、今ぢや何んな事でも子供の爲にして遣るだけの權力を得たらう。彼奴等は何時でも好きな時に彼の子を僕から奪つて行かれるよ。

グレーゲルス　ヘードキツヒは何んな事が有つても君を捨てはしないよ。

ヤルマア　左樣確かな事は言へなからう。彼奴等が手招きして、黃金の餌を投げさへすりや――！　あゝ、僕は實際彼の子を可愛がつて居たよ！僕は小さい子の手を曳いて、暗がりの大きな室の中を連れて歩きでもする

様に、彼の子の手を執つて優しく引廻して遣るのが、僕の最大幸福だらうと迄考へて居たんだよ！　――それが今ぢや、僕の様な屋根裏の貧乏寫眞師は、彼の子に取つて、眞實何でもなかつたと云ふ――こんな情ない事に成つちやつた。彼の子は只時節が來る迄、僕の家で好い顔で暮して行くために、旨く僕を騙して居たんだよ。

グレーゲルス　ヤルマア君、君だつてまさかそれ程には思つて居ないだらう。

ヤルマア　惡い方を言やア斯うなんだ――如何思つて可いか、僕には分らない――僕には決して分らないよ。君は又實際僕の言つたやうな事が有得ないと思ふのかい。ほッほ、グレーゲルス君、君は餘り『理想の要求』に信を置き過ぎて居るよ！　一たび金子の有る奴等が遣つて來て、子供に喚び掛けたとして見玉へ、『そんな男は捨てゝ、早く此方へお出で、此處へ來

りや何んな榮耀榮華でもさせて遣る』――と！

グレーゲルス（速く）うむ、それから如何だ？

ヤルマア　それから僕が訊くんだ、ヘードヰッヒや、お前は私のためにそんな生活でも抛つ勇氣が有るかと。（侮蔑した樣に笑ふ。）いや、有難う！何んな返辭を僕が爲れるか、今に分るよ。

屋根裏の室の中から短銃の音聞ゆ。

グレーゲルス（喜びの聲を上げて、）ヤルマア君！

ヤルマア　あゝ、親父が又屹度狩をしてるんだな。

ギイナ　（這入つて來て、）ねえ、貴方、お祖父樣は屋根裏へ這入つて自分で打つてらつしやる樣ですねえ。

ヤルマア　一遍見て來やう。

グレーゲルス（感動して、熱心に、）一寸待ち給へ、君はあれが何だと云ふこと

を知つて居るか。

ヤルマア　勿論知つてるよ。

グレーゲルス　いや、君は知らない。僕が知つてるんだ。あれが證據だよ！

ヤルマア　何の證據だい？

グレーゲルス　子供が自分を犧牲にした仕業だよ。彼の子が君の阿父さんに頼んで鴨を打つて貰つたんだ。

ヤルマア　鴨を打つた？

ギイナ　まア如何したら――！

ヤルマア　そりや何の爲だい？

グレーゲルス　彼の子は君のために自分の一番大切に思つてる物を犧牲にしやうと爲たんだよ。そしたら君が又自分を可愛がつて呉れる樣に成るか

と思つて――

ヤルマア　（感動して、優しく）　あゝ、可哀相な子だ！

ギイナ　彼の子は如何したんでせうね？

グレーゲルス　ヤルマア君、彼の子は只君に愛して貰ひたかつたんだよ。君に愛して貰はれなきや生きて居られないんだ。

ギイナ　（涙と闘ひながら、）それ、それ御覽なさい、貴方。

ヤルマア　ギイナ、彼の子は何處に居る？

ギイナ　（鼻を啜つて、）えゝ、彼の子は臺所に居た筈ですよ。

ヤルマア　（臺所の戸口へ行つて、戸を引き開ける。そして言ふ。）ヘードヰツヒや、お出で〳〵、私の傍へお出で！（見廻して、）いや、此處には居ないよ。

ギイナ　それぢや、屹度自分の部屋ですよ。

ヤルマア　（外へ出て、）いや、此處にも居ないよ。（這入つて來る。）何處かへ

出て行つたんぢやないか。

ギイナ　えゝ、貴方は此家に彼の子を置いて遣らぬと仰有つたのでせう。

ヤルマア　あゝ、早く戻つて呉れないかな――早く話がして遣りたい――グレーゲルス君、最う何も彼も元々通りに爲るよ、悉皆一緒に成つて新たに生活を始めて見せるよ。

グレーゲルス　（靜に、）僕はそれを知つて居た、彼の子が元の鞘へ納めるだらうと思つて居た。

老エークダル自分の室の戸口に現はれる。盛裝して頬に劍の扣子を嵌めやうとして骨折つて居る。

ヤルマア　（吃驚して、）阿父さん！　貴方其處に居たんですか。

ギイナ　自分の室で鐵砲をお打ちに成つたの？

エークダル　（怒氣を含みながら、近づいて）ヤルマア、お前は一人で狩を爲る

氣なんだね？

ヤルマア　（激昂もし惑ひもして、）それぢや今屋根裏で打つたのは貴方ぢやないんですね？

エークダル　俺が打つた？　ふむ。

グレーゲルス　（ヤルマアに向つて喚ぶ。）彼の子が自分で鴨を打つたんだよ！

ヤルマア　何だつて？　（急いで屋根裏の戸へ近づいて、それを引開け、室の中を覗きながら聲を上げて喚ぶ。）ヘードキツヒ！

ギイナ　（戸口へ駈けて行つて、）ど、如何したんです？

ヤルマア　（中へ這入つて、）床に倒れて居るよ。

グレーゲルス　ヘードキツヒが！　倒れて居る！

ヤルマアの傍へ行く。

ギイナ　（同時に、）ヘードキツヒ！（屋根裏の内側で、）やゝゝ！

エークダル　ほッほ！　彼の子迄狩に行くのかい。

ヤルマアとギイナ、グレーゲルスと共にヘード井ッヒを技術室へ運ぶ。だらりと垂れた右の手に、堅く指を握り緊めたまゝ、短銃を摑んで居る。

ヤルマア　（心も亂れて、）短銃（ピストル）が破裂したんだ。自分で負傷（けが）をしたんだ。助けを喚（よ）べ、助けを！

ギイナ　（廊下へ出て喚ぶ。）レリングさん！　レリングさん！　お醫者のレリングさん！　早く來て下さい、早く！

ヤルマアとグレーゲルスの兩人ヘード井ッヒを長椅子の上に置く。

エークダル　（靜に、）森が復讐するのだ。

ヤルマア　（ヘード井ッヒの傍に膝を突いて、）今に氣が附くよ。氣が附きかゝつて居る——左樣だ、〳〵、〳〵。

ギイナ　（二たび這入つて來て居たが、）何處に負傷（けが）をしたんです？　私には何

も見えませんよ——

レリング遽てゝ來る。直ぐ其後からモル井ックもつゞく。モル井ックは胴衣も頸飾もなく、上衣の前を開けたまゝ着て居る。

レリング　如何したんですか。

ギイナ　ヘードキッヒが自分を打つたと言ふことですよ。

ヤルマア　早く來て助けて呉れ玉へ。

レリング　自分を打つた！

と、卓を側（わき）へ推遣つて、子供の身體を檢査し始める。

ヤルマア　（跪いて、心配相にレリングの顏を見上げながら、）危險なことはないね？　レリング君、言つて呉れ玉へ。血は些（ちっ）とも出て居ないんだよ。危險なことはないね？

レリング　如何してこんな事に成つたんだい？

ヤルヤア　僕等は知らないんだ――！

ギイナ　此子が鴨を打たうとしたんだ相ですよ。

レリング　鴨を？

ヤルマア　短銃が破裂したに違ひない。

レリング　ふむ。成程。

エークダル　森が復讐するのだ。だが、俺はそれでも怖れはしない。

屋根裏の室へ這入つて、其後から戸を閉める。

ヤルマア　で、レリング君――何故君は何とも言つて呉れんのだい？

レリング　彈丸は胸に止つて居る。

ヤルマア　うむ、だが此子は氣が附きかゝつて居るよ。

レリング　好く見給へ、ヘードヰッヒは最う死んでるよ。

ギイナ　（聲を上げて泣出す。）あゝ、此子が、〳〵！

グレーゲルス　（嗄れた聲で、）海の深みで――

ヤルマア　（飛び上る。）いや〳〵、此子は如何しても生かさな置かぬ！

あゝ、賴むに、レリング君――只一分間で可い――切めて僕が始終何んなに此子を可愛がつて居たか、それを一言言つて聞せる間で可い！

レリング　彈丸は心臟を貫いて居る。內部出血、卽座に死んだものに違ひない。

ヤルマア　それで僕は！　僕は獸の樣に此子を追ひ遣つたんだ！　此子は怖けて窃と屋根裏へ這ひ込んだ、そして僕に愛して貰ひたいばかりに死んだんだ！　（嗚咽しながら、）僕は決して此子に償ふことは出來ない！　此子に言ふことも出來ない――！（上を向いて、拳を握つて叫ぶ。）おゝ天に坐します神――神と云ふものが在るなら！　何故これを私の上に下したまはらぬか！

ギイナ　靜に、〳〵、そんな怖しい事を仰有るもんぢや有りませんよ。私

が思ふに、此子は私達の傍に置く權利がなかつたのです。

モルヰツク　此子は死んだのぢやない、眠つてるのだ。

レリング　馬鹿ッ！

ヤルマア　（稍落着いて、長椅子の傍へ行き、腕組をしながら、凝乎とヘードヰツヒを眺める。）堅アく成つて靜に寢て居るよ。

レリング　（短銃を離さうと試みる。）怖しく堅い、怖しく。

ギイナ　いえ〳〵、レリングさん、指に傷を附けん樣に、短銃は其儘にして置いて下さいませ。

ヤルマア　此子にそれを持たして遣るが可い。

ギイナ　え、、左樣ですわね。だが、此處で見世物にして置いても不可んでせう。此子の室へ伴れて行きませうか、貴方、手傳つて下さい。

ギイナとヤルマア二人の間にヘードヰツヒを挾む。

ヤルマア　（二人して子供を運んで行きながら、）ギイナや、〳〵、お前は此後に生きて居られるかい！

ギイナ　お互に助け合はなきや成りませんよ。かう成りや、何と言つても、此子は二人の所有ですからね。

モルヰツク　（兩手を擴げて口の中でもぐ〳〵言ふ。）神よ祝福されてあれ。爾は地に歸るべし、地に歸るべし——

レリング　（囁く。）默つて居れ、此馬鹿。貴樣は醉拂つて居るんだ。

ヤルマアとギイナ、臺所の戸口から死骸を擔ぎ出して行く。レリング其後から戸を閉める。モルヰツク廊下へ滑り出る。

レリング　（グレーゲールスの傍へ行つて言ふ。）短銃が偶然發火したとは、僕には如何しても思はれませんね。

グレーゲルス　（怖しさに顏の筋肉をぴく〳〵させながら、茫然立つて居たが、）如何

してこんな怖しい事に成つたか、誰だつて分りますもんか。

レリンゲ　着物の胴が煙硝で焦げて居る。彼の子は屹度短銃を胸へ中てゝ打つたに違ひ有りませんよ。

グレーゲルス　ヘードキッヒが死んだのは無駄ぢやない。此の悲しみの爲に、彼の男の持つて居る尊いものが何んなに動かされたかと云ふことを、君は氣が附かなかつたのか。

レリンゲ　目の當り『死』に面すりや、大抵の人間は向上されるさ。それが何時迄續くと思つてるんですか。

グレーゲルス　一生涯の間、續きもすれば發展もしませう。

レリンゲ　なに、一年も經たぬ間に、ヘードキッヒは、彼の男に取つて、朗讀の好題目たる外何でもなく成るでせうよ。

グレーゲルス　君は如何してヤルマア　エークダルの事をそんなに言ふの

です？

レリンゲ　まアそんな話は、彼の子の墓の上に一度草が枯れてからにしませうよ。其時に成りや、彼の男は口を尖らして、『あゝ、我子は父の胸から餘りに早く引裂かれた』とか何とか言つてますよ。例の甘い情緒と自己咏嘆と自己憐憫の中に浸つて、好い氣に成つて居ますよ。まア見て居て御覽なさい。

グレーゲルス　君の言ふ事が正しく、僕が間違つてるとすりや、此世は生きてる甲斐のないもんだね。

レリンゲ　いや、此世は要するにそれ程我慢の出來ないものでも有りませんよ。只、貧乏な僕等の所へ、『理想の要求』なぞ持つて督促りに來る怖かない小父さんさへ無けりやアね。

グレーゲルス　（自分の前を直に見詰めながら、）それぢや、僕は僕の運命があ

れだと云ふことを喜ぶよ。

レリング　失禮ですが――貴方（あなた）の運命と云ふのは？

グレーゲルス　（立去らうとしながら、）食卓（テエブル）の十三人目です。

レリング　何だ、詰らない。

――終――

大正二年二月十五日印刷
大正二年二月十八日發行

（定價六拾錢）

譯者　森田草平
發行者　佐藤義亮　麹町區飯田町三丁目二十五番地
印刷者　山本定輔　小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京市麹町區飯田町三丁目二十五番地　新潮社　電話（番町）二二三三番　振替（東京）一七四二番

不許複製

IH46-6

新潮社出版飜譯書

死の勝利 ダンヌンツィオ作 生田長江氏譯 (三版) 壹圓四拾錢 郵税拾貳錢

サフオ ドオデエ作 武林無想庵譯 (新刊) 價九拾五錢 郵送料八錢

獄中記 オスカアワイルド著 本間久雄氏譯 (四版) 價四拾五錢 郵送料四錢

露國新作家集 毒の園 昇曙夢氏譯 (再版) 價九拾錢 郵送料八錢

ツルゲーフ 散文詩 草野柴二氏譯 (三版) 價參拾五錢 郵送料四錢

ツァラトゥストラ ニイチエ著 生田長江譯 (再版) 貳圓參拾錢 郵税拾貳錢

4

終